「スナックのママさん」

（2015）

会社に入り、知らぬ地での新しい生活が始った。初めての酒飲みとの付き合い、飲み屋・スナックの世界、接待の慣わし・・・大学時代、元々酒に弱い事もあり、酒との縁の薄い生活だったが、会社生活はそうは行かない。お酒を飲む事も仕事の一つだった。スナックと言うケッタイな商売を知り、僕は半分呆れ顔だった。未だ飲んでもいないのに「キープ」とやら訳の判らないひと言でウィスキーやブランデーが高い料金で前払い請求され、しかもこれで次に飲むとき無料にでもなればまだしも、既に金を払ったのに更に自分のボトルに追い銭を払って又飲まなければならない・・・この不思議さ。そんなにお高いお酒ならしっかり味わって飲めば良いのに、氷で薄めたり、お湯で薄めたり・・・。

入社したての頃、通い始めたスナックのママさん達は皆、僕と同世代或いは少し年上の・優しい・何でも知っているお姉さん達だった。その内不思議な事に同世代という共感もありママさん達とは心を開いて真実の話が出来た。僕達の知らない街の情報や会社の情報量は凄かったし、何よりも何故か彼女達は例外なく綺麗だったし、あの色香も心地良かった。

５年、１０年経ち、僕は結婚もし、彼女達の中には結婚した者もいたし、結婚してすぐに別れた者もいたし、ずっと一人だがどうやらパトロンらしき男がいるらしいという者もいたし、本当に一人を通す者もいた。

いずれにせよ彼女らは酒場という一国の主であるだけに、我々と同じサラリーマンの世界に置き換えれば明らかに部長・事業部長位になってもおかしくない程の優れた才覚・決断力・行動力が備わっていた。

僕は酒をあまり飲む方ではなかったが、知り合いやお客さん達を大勢連れて行き、東京や大阪からのお客さん達も随分紹介してあげていた。その内に遠くからの出張のお客さんもこの店にすっかり馴れ親しみ、僕抜きでもちゃっかりねんごろになってゆく者達も現れた。

一方我々の建築の部署のゴルフコンペや、花見会等にはいつも何人かのスナックのママさんが同席する艶やかな会となり評判にもなり、二次会の行き場に皆頭を痛めたものだ。

あれから４０年、僕もすっかり飲み屋さんとのお付き合いも無くなり、彼女達もすっかりいいお歳になり、消えてゆく余韻を楽しむようにお客の来なくなった店で一人ストーブに当たり本を読んでいるのを時々見かける。本当にこの商売が好きなのだなと思う。湯水のようにお金の儲かるシステムで何とか余生に困らないお金を貯めたのだろう。中にはお酒商売を止め、喫茶店として美味しいコーヒーを出してくれる店に様変わりしたママさんもいる。僕は今でも此処には月に何度か立ち寄らせてもらい、退職後の仲間達の消息やら、年金の話やらで長居をし、コーヒー代４００円を払って帰る。

冬ざれや　主(しゅ)は来ませりと歌いなむ

スナックは聖夜の歌で鎮(しず)まりぬ

香水と酒にまみれて年送る

香水の名残りもありて冬酒場

雪しんしん　酔いし女の理屈聞く

クリスマス　酔いし女に生返事

女酔い　男は酔えぬ夜の秋

深酒す　女の性(さが)や年果つる

酔うほどに発句飛び交う箸(はし)袋

年忘れ血糖値のこと佳境なり

肩書きの無き友となり冷やし酒

酒匂う夜中の電話　雪女郎

何処からか天の国　雪しまく街

ブランデー飲んで愛して春の果て

ワイン飲み　愛をせがみて初時雨